



一般社団法人

ロゴス腹話術研究会

2019年6月6日

会報

第10号

説教『心の貧しい者』

春風つばめ

「心の貧しい人々は、幸いである。天の国はその人たちのものである。」

(マタイによる福音書5章3節)

「心の貧しい人々は、幸いである。天の国はその人たちのものである。」これは、いわゆる「山上の垂訓」の一節です。ある時、イエス様が、どこの山であるかは分かりませんが、弟子たちを小高い山に集めてお話をされた冒頭に出てくる言葉です。

この言葉の意味をお話させていただく前に、私の個人的なことを少しお話しさせていただきます。

私が、40～45歳の頃というのは、私の人生のどん底でありました。牧師を辞めなければならぬかも知れない、そんな大きな失敗をしました。その心労がたたリ、45歳の時、救急車で病院に運ばれ、心筋梗塞と診断、3週間の入院を余儀なくされました。

そんな体験をした私は、ある方から、つぎのような励ましの言葉をいただきました。

「己の未熟を識ることの幸いよ。これより人たる学びの道程（みちのり）はあらん。ひたむきにうむことなき歩みの日々を過ごされますように。」

「自分が未熟であったから、このような人生の挫折と大病を患うことになったと認識できることは幸せなことですよ。そこから、人としてどう生きたら良いか、その学びが始まります。私は、あなたのために、『ひたむきにうむことなき日々を過ごされますように』祈っています」ということだろうと思います。

初めは、私は、自分が未熟であったから大きな挫折を味わい、大病を患うことになった



という認識はありませんでした。そういう認識よりも、「どうして、こんなことになってしまったのか」その理由が分かりませんでした。そして、失敗したことにより、たくさんの人々から批判され、責められました。私は、その人たちを恨んだり、憎んだりしました。そして、いつかは、成功して私にひどい言葉を浴びせた人たちを見返してやりたいと考えていました。

そんな思いを抱きながら、何年も月日が流れました。そうした日々の中で、アッシジの聖フランシスコとその弟子レオーネの対話を知りました。アッシジのフランチェスコは、フランシスコ会の創設者として知られる有名なカトリック修道士です。J.J. ヨルゲンセン著『アッシジの聖フランシスコ』（平凡社）の中に、こんなお話が出てきます。

寒い冬の日、二人は伝道に出かけ、フランシスコは弟子のレーネに、私たちが身体障害者の障害を取り除くことができたとしても、そこに完全な喜びはないことを肝に銘じなさい、と言います。さらに、しばらく歩くと、不信仰な者がすべてキリスト教徒に改宗しても、完全な喜びはそこにはないことを肝に銘

じなさい、と言います。さらに、いろいろなケースを取り上げて、こういうことが起こっても、そこには完全な喜びはない、そのことを肝に銘じなさい、と言います。すると、ついにレオーネは「完全な喜びはどこにあるのかを、教えてください」と言います。すると、フランシコは、このように答えます。

「私たちはこうしてポルチウンクラへ向かっているが、雨にびしょ濡れになり、寒さにかじかみ、道の泥にまみれ、飢えに苦しんでおり、修道院の門をたたくと、門番が出てきて、腹を立てて『だれだ』という。こちらは『二人の修道士です』と答える。するとこうだ。『うそをつけ、追い剥ぎだろう。うろつき回っては人のものをかすめ、貧しい者からほどしをひったくる奴らだ。さっさと行っちゃまえ！』門番はそう言って門もあけず、空腹の私たちを外の雪と水と寒さの中に、ほったらかしにしておく。日が暮れる。そんな時、私たちはそんな悪口や悪意や取り扱いに耐え、がまんして、怒ったり、不平をならしたりせずに、この門番は私たちのことを見通していて、彼にそう言わせたのは神である、とへりくだって愛情を持って思う時——おお、兄弟レオーネよ、いいかね、これこそ完全な喜びです。」

私は、この物語と出会ってから、大きな挫折をしたこと大病を患ったこと、それは神様が私に自分の未熟に気づきなさい、と教えてくださいました。誰が悪いのでもない。私のことを責めたり、悪く言う人たちもいましたが、それも、そのように言わせたのは、神であると思えるようになりました。つまり、それだけ自分が未熟であることを自覚しなさい。そして、そこから人としてどう生きたら良いのか学びなさい。つまり、そのような挫折をしたとしても、気高い人間として生きる道は開かれている。その道を探し出して、その道を進むことではないか、そのことを神は求めておられるのではないか、そう言う気づきをいただきました。

イエス・キリストは「心の貧しい人々は、幸いである。天の国はその人たちのものである。」と言いました。「心の貧しい人々」

と言うのは、自分の未熟を識る者である、と私はこの言葉を理解しています。自分の未熟を知るからこそ、精進して、少しはまともな人間になろうとするものであろうと思います。

少しはまともな人間になると言うことは、高貴な心をもって、一瞬一瞬を生きてゆくこと、常にそのように生きることができるように努めてゆくことでもあろうと理解しています。

己の未熟を知っているからこそ、高貴な心を育てる。天国とは、そうした高貴な心を育てた人のものである、とすることをイエス様は教えてくださいましたのではないかと、言うことです。そして、高貴な心を育てることを、別の言葉に言い換えるならば、「天に宝を積む」と言うことです。試練が過酷なものであればあるほど、高貴な心を育てることは難しくなります。しかし、過酷であるからこそ、より一層高貴な心を育むことができるものでもあります。

ロゴスの笑いは、低俗なものであってはならない、ことをイチロー師匠から教わってきました。品のある笑い、多くの人を癒したり、励ましたり、希望を与えることのできるような笑いは、高貴な心を育む日々の努力なくしては生まれられないように思います。

「心の貧しい人々は、幸いである。天の国はその人たちのものである。」

この主イエスの言葉が、ロゴス腹話術の道に励まれる皆様にとって一つの指針を示すものとなりましたら、本日の礼拝のお役を務めさせていただいた私の大きな喜びです。

日本キリスト教団島之内教会牧師 木戸定
(ロゴス腹話指導者術研修会・技術認定会開会礼拝説教より)

2月11日研修会を振り返って

理事 春風とんぼ



ロゴスが誕生して実に五十二年。イチロー師匠が残してくれたロゴスの腹話術が生き続けていることは不思議でありません。

唯なんとなく生きているのではなく『腹話術のすべて』が表紙から最終の頁、つまり「イクテウス（ギリシャ語で魚の意味：注）」のマーク迄、『くせになりそう』の研修項目に要望されてきたことが最大の喜びです。

「なぜ魚らしきマークですか？」と質問されたのです。また「師匠のイラストで眼はヨコがつり上がっているはず、腹話術伝承への執念にもえております。このイラストの作者

は今どうしていますか？」この急襲には、目を白黒しました。かくの如く『腹話術のすべて』を徹底的に学び直したいと言う申し出があったことです。

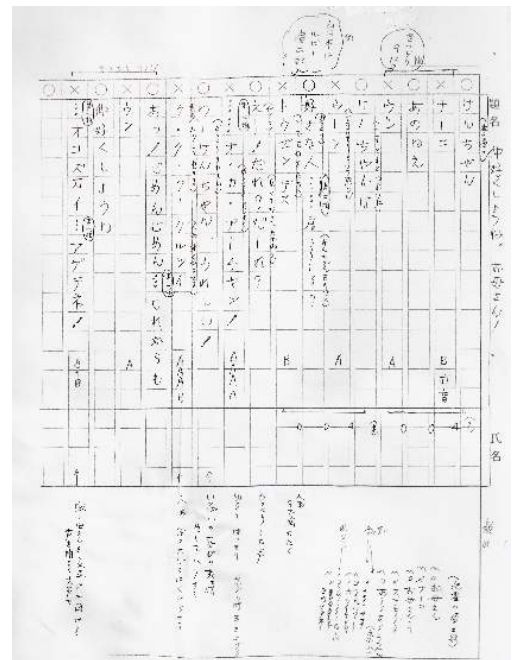
師匠が「くせになりそう」と言われた事は「何」だと思えるか？と言う質問には百人百様、こんなにも気にしていることが多かったのだと思われました。

一級挑戦の三人は、真剣勝負でぶつかって来ました。台本の扱い方、台本に記されたルビが忠実に演技に反映されていました。近い将来、指導者に立ってくれるにふさわしい人材であったことが最大の収穫でした。

さあ、中部地方に偏在している会員をもう少し広げたいと言う祈りがあります。

真のロゴス腹話術を掘りおこして行きたいと思いますがだんだんと時間がなくなって来ました。神さまのお導きがなければ、進む路は見えません。時間をもう少し残してくださいと願いつつ、心を1つにした仲間が頼もしい。このことも大きな喜びです。

注：イクテウスはギリシャ語でイエス、キリスト、神の子、救世主の頭文字を並べた単語でもあります。本会報の1面左上の魚のマークです。



台本の書き方

研修会・技術認定会感想

会員

いろいろな内容はとても参考になりました。発声練習では、頭音の出し方。「手のひらをたいように」では、手話による声の表現の仕方を学習しました。技術認定（1級）では、台本、しゃべり方、発音、間の取り方、人形の表情等よかったです。『腹話術のすべて』の「イチローの腹話術 ズバリひとこと」では、声を出して読んだことは久しぶりだったので、音読、群読の素晴らしさを体験しました。交流会は、とてもおいしい昼食とコーヒーで交流を深めることができました。「いなむらの火」の春風ひすい先生の紙芝居は、声、絵、物語の進行がとても素晴らしく感動しました。また「たたくとポン」もたいへん面白く、近々地元でペーパークラフトがありますので参考にします。「くせになりそう」と「台本の書き方」の春風とんぼ先生は、毎日コツコツとくせになるくらいの練習の大切さを学習しました。また「台本の書き方」では、物をつくりあげふくらませる（民話等）台本にルビにて感情や演出を記入して内容を楽しく展開することを学び、生かしていきたいと思います。

兄野田市朗と料理人の私の歩み —「ケンちゃん」は私の名前に由来します

ロゴス腹話術研究会アメリカ会員
野田健一

主の御名を心から賛美いたします。

今日も神様の豊かなお恵みにより、清められ、強められ、祝福され、聖霊の御技の中で生かされていることに感謝いたします。

日本のロゴス腹話術研究会会員の皆さま、初めまして。野田市朗（春風イチロー）の弟の野田健一です。アメリカ在住のロゴス会員として初めて会報に寄稿させていただきます。今回は兄市朗とこれまでの私の料理人としての歩みを紹介させていただきます。

東京生まれ、4人兄弟の末子です。兄市朗との間に姉が二人いて末子が美男子の私？健一です。父の日本一健康に育てて欲しいとの願いで、健康第一から健一と名付けられました。その親の願いがかない、85歳の現在までお医者様の薬は飲んだこともなく、血圧、コレステロール等検診でも正常と診断されています。

私の市朗兄の記憶は、何時も机に向かい勉強していたことです。そして夕食後は必ず家族を前にして、得意のマジック劇場をしていました。兄は色々な手品で家族を楽しませ、落語家の物まね等で笑わせてくれました。娯楽のない時代でしたが、私たち家族は何時も笑いに満ちていました。そんな市朗兄は、腹話術の人形に、響きが良く可愛い弟の名である「ケンちゃん」と名付け活躍してゆくのです。

一方、私が日本料理の板前を目指したのは、母の存在が大きいです。幼い頃、いつも母の作る料理に興味津々でその傍に座り込み、料理の仕方、仕込み方、盛り付け、煮方、焼き方等々を見て楽しんでいました。

コンピューターもテレビもなく、頼るのは、感ピューターという古き良き時代、唯一の



(2017年新丸子教会墓地にて野田めぐみ理事長と)

楽しみは、母が買って来た丸ごとの魚や大根、かぼちゃ等の素材が、見る見るうちに変化し、庭の青葉等で彩どり良く盛り付けられることです。完成した料理に乾杯ではなく拍手をしないわけにはいきません。他の兄弟は調理に興味はなく、出来上がりの料理を喜んでむしゃむしゃ食べるだけでした。でも私にはこの母が心を込めて作ってくれた料理は、まるで兄のマジックのように映りました。5歳にして、私は日本一の料理人になると決心したのでした。

私が義務教育を終え念願の料理人になるとすると、10歳年長の兄から「健一、社会は甘くない。今の社会は教育が第一。学問なくては社会に通用しないから、上の学校に行くように」と言われました。兄は進学の手配もしてくれたのですが、親戚が推薦する料理屋から早く来るように言われ、兄に断り念願の料理の道に入りました。

さて、「包丁一本 さらしに巻いて、旅へ出るのも 板場の修業…」と演歌にあるように料理人は料理屋、ホテル、旅館等、変化をつけて修業して腕を磨いて行くのが習いでした。それは、一人ひとりの板長の長所を学び、腕を磨いてゆくためです。私は色々な場所で修業して歩き、頼まれて板長として戻った湯河原温泉老舗の翠明館で働いている時、女将から英子を紹介され結婚しました。私26歳、英子25歳。それから54年間、お互い愛し合い、祈り合い、助け合い、励まし合い、譲り合いながらの楽しい思い出多き人生でした。

1961年2月結婚式の日、外務省より公用のパスポートを頂くと、若き2人は胸を躍らせオーストラリア、シドニーの総領事館付き料理人として働き始めました。当時のオーストラリアはのんびりとして、慌ただしい東京から来た私はびっくり、しゃくりでした。だって海の栈橋に行き、釣り糸に海老を付け垂らすと小鯛がぼんぼん釣れるのですから。また潮が引くと岩場にアワビがあちこちにいて手づかみで取れました。岩の間には、ウニの大きいのが山といます。サザエもなまこも、日本であれば高級食材のこれらを、総領事館のVIPのパーティーに使いました。小鯛は姿焼きでサザエもつば焼き等でお客様をもてなしました。

2年8カ月の総領事館勤務の後帰国すると、今度はブリジストンタイヤ経営のホテルで料理長として迎えられました。しかし間もなく、アメリカ西海岸のパヨラ大学神学校に通い、リバーサイドの教会で牧師をしている市朗兄から、「健一、アメリカは素敵な国だから来ないか？」と誘いがあり、後先考えない若い私達は、ホテルを退社して何の保証もないアメリカに旅立ちました。

当地に着くとすぐ、映画の都ハリウッドの老舗料亭のインペリアルガーデンに招聘され、料理長として勤務しました。3年目には、映画俳優の住む高級住宅地ビバリーヒルズに新しくオープンした、センチュリープラザホテルの大和レストランに料理長として迎えられました。そんな折、地元のロサンゼルスタイムズ新聞社主催で、各一流ホテルの料理長が料理講習する機会があり私もホテル代表で出場しました。日本の芸術である剥きもの大根やニンジン、胡瓜、芋等で鳥、舞鶴、孔雀等を剥き、料理も作りました。当時和食は一般的ではなく、それを見た人々は芸術的な美しい日本料理に感動して下さいました。そして次の日の新聞に私の写真記事が載り大反響がありました。それまで500人程度だった店のお客様は、その日から一晩700人も来るようになり多忙になりました。特に毎晩のように来てくれたのは、フランク・シナトラ、サミー・デイヴィスJr.、ディーン・マーティン、ザ・ローリング・ストーンズ等、著名な歌手、映画俳優

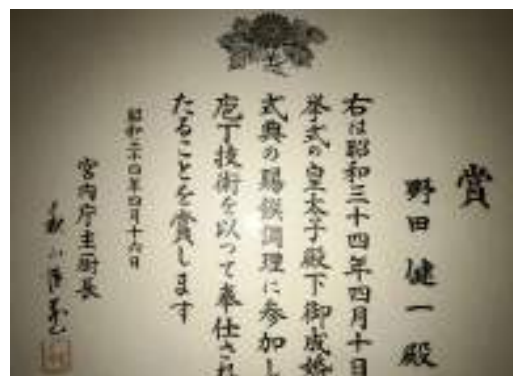
優で、私の店はその社交場になっていました。

このホテルに7年勤め、私は自分の店を持ちたくなり独立しました。自分で店を始めて約28年。全てとんとん拍子で健康にも恵まれ、神様に何時も守られ感謝で祝福されての人生でした。

市朗兄は日本に帰国しましたが、度々アメリカの地に来ては当地の日系人教会でケンちゃんの腹話術を使い、各地を回り伝道集会を開きました。当時はアメリカにも春風イチロー師匠の弟子もおりましたので、その人達も教会で交流していました。

一番思い出に残るのは、私の通うフリーメソジスト教会の会員の34歳の女性ハドレーさんです。教会で兄の説教を聞き、悔い改め洗礼を受けられ、私の家での家庭集会でも一生懸命聖書を学んでいました。残念ながらお子さんを残し癌で昇天されましたが、痛みもなく、平安の内に喜びに満ち溢れた最期でした。市朗兄が昔アメリカの各地で行った伝道集会で蒔いた一粒の種は、今は大きく花開き大輪の花となっています。種も落ち又次の世代にと永遠に続くことを祈っています。

私の料理人人生を振り返る時、夢のような人生でした。神様は何時も私達の背後にいて下さり、進むべき指針を示して下さいます。特に思い出に残るのは、昭和34年4月10日の皇太子殿下、美智子妃殿下のご成婚のことで、何日か前から式典の宮内庁皇居に入り、ご成婚の料理に力一杯携わりました。そしてこの記事を書いている時、元号は「令和」に変わり一つの時代が終わったことを感じます。



介護から学んだ三つの事 (前号のつづき)

テレサ・コースケ



- コースケ君
 - × ナアニ
 - あのねえ
 - × ウン

 - 今日のお話しはね、介護から学んだ三つの事
 - × ドンナコト
 - どんなことでしょうね
 - × ヒトツ
 - ひとつは、整理整頓
 - × アンタノコトヨ
 - 私の家、散らかってるね！
 - × フタツ
 - 二つは
 - × ウン
 - 感動すること
 - × カンドウデスヨ
 - そう感動することね。そして三つめは
 - × ナーニ
 - 三つめは、感謝する事
 - × アリガトー
 - そうそう。お客さま 来ていただいて
 - × アリガトー
 - じゃ お話を始めましょうねえ

 - おばあちゃんの介護で一番困ったのはね
 - × ウン
 - おむつの中に手を入れて粘土をこねるように手をすり合わせているの
 - × ウウ〜 汚イ
 - どうしてこういうことするのかなって考えたらね
 - × ウン
 - 年をとって認知がくると、匂いがわからない、目も見えなくなる
 - × ハクナイショウ ヨ
 - そう白内障もあって、耳も遠くなり人の話も聞き取れないのよ
 - × タイヘンダ
 - 出来るだけゆっくり、聞き取りにくい言葉は使わないようにしたのよ
 - × フーン
 - オムツの中に手を入れるのを防ぐには、
- オムツの上にはく、短いパンツとシャツをオープンファスナーでつなぐの
 - × ウン
 - オムツの交換は、ファスナーを外して体を横にして、身体をゴロゴロ動かして
 - × 運動スルノ
 - そう運動するのよ
 - × ウン
 - その時、お腹を左から右に押しったりしてね
 - × ウン
 - 手袋をして肛門をほじったり
 - × キタネエナ
 - 出なかったら困るんだから
 - × ソウネ
 - 扇風機を自分の後ろにおいてね
 - × ウン
 - おばあちゃんの方には向けないようにして、匂いを外に出すようにしたの
 - × フーン、
 - 介護はね、ある程度自分のために工夫をして、出来るだけ仕事を楽にするのよ
 - × ウン
 - おばあちゃんも気持ちの良い生活したいでしょ
 - × ソウネ
 - 食事をする時 おばあちゃんは「おいしいね」って言うのよ
 - × フーン
 - 「生まれて初めて食べた」って言うのよ。それを聞いた時ね
 - × ウン
 - 私思ったの。贅沢になって、一番初めに食べたもの、一番初めに触れたものに感動する事を忘れていたの
 - × カンドウスルネ
 - 感動するってことをおばあちゃんは教えてくれたのよ
 - × ヨカッタネ
 - おばあちゃんはね、亡くなるその日まで「静子さんありがとう」って
 - × アリガトウ、ダケナライエルヨ
 - 「あなたのおかげよ」って言ってね、亡くなった
 - × アリガタイネ

保育園でのボランティア活動

2019年3月20日、都内の保育園で春風テレサさん、春風ウータンさんによる腹話術のボランティアが行われました。6歳までの80人の子ども達が食い入るように演技に見入っていました。ウータンさんが「質問がある人？」と問いかけると、たくさん手が挙がりお人形への素朴な疑問が寄せられました。またテレサさんが「イツツ」の台本で語りかけると、大うけしていました。「幸せなら手をたたこう」などの歌も一緒に歌いました。最後に「また来て良いかな？」には、「いいよ。だって大好きだもん」「だって面白いんだもん」との声が飛んでおり、素晴らしい会となりました。たいへんお疲れさまでした。



2018年度 ご寄付いただいた皆様

ご寄付をいただきました皆様には、心より御礼申し上げます。いただきましたご寄付は、当研究会の運営等のために役立たせていただきます。誠にありがとうございました。

春風とんぼ、春風テレサ、春風ひすい、春風ウータン、春風テッテル、春風赤とんぼ、春風イチゴ、春風福笑、春風つばめ、野田めぐみ、伊東ゆたか、匿名3名
総計818,500円

●ホームページ更新中！

春風とんぼさんのコラムも更新しています。

URL : <https://logos.or.jp>

〈事務局だより〉

【初心者研修会】

2019年5月、豊田腹話術の赤とんぼさんが研修会を実施しました。新しい腹話術の仲間を歓迎いたします。

【今後の予定】

運営委員会：6月7日。

総会・第6回技術認定会：2019年6月21日10時から名古屋駅近く「百楽」にて。

第7回技術認定交流会：2019年11月23日。



春風赤とんぼ作

〈編集後記〉

野田健一さんは1960年代、まだ西洋人が生で魚を食べることに強い抵抗があった時代から、今の和食ブームの先駆けとして奮闘されました。多くのご苦労があったことは疑い得ないのですが、ご夫妻は明るく前向きな姿勢でその地に根付いていかれたと感じます。また添付の賞状に名が記されている、宮内省主厨長（料理長）秋山徳蔵氏は、その半生が2015年にドラマ『天皇の料理番』で、若手人気俳優の佐藤健により演じられました。この皇室の慶事に野田さんも一緒に働いており、ドラマと重なって当時の料理人さんたちの奮闘が目に見えようでした。

○振込用紙を同封させていただきました。
年会費5000円、寄附をどうぞよろしく願いいたします。

【会費・寄付金振込先】（名義はともに、“一般社団法人ロゴス腹話術研究会”です）
ゆうちょ銀行：振替口座番号 00240-2-103127
ゆうちょ銀行：店名：〇二八（読みゼロニハチ）店番：028 普通預金 8 8 5 9 0 5 2
みずほ銀行：武蔵小杉支店 店番 3 7 8 普通預金 口座番号 2 8 5 3 7 6 6

発行：一般社団法人 ロゴス腹話術研究会 事務局
〒211-0005 神奈川県川崎市中原区新丸子町734-1
アベニオ新丸子ビル402号
TEL/FAX：044-733-6650
メールアドレス：harukaze@logos.or.jp
ホームページ：https://logos.or.jp